

イヌビエは、北緯 39 度以上の高緯度地域の系統は到穂日数がほぼ 80 日以下の早生に限定されていたが、北緯 38 度以南の関東以西の系統は 80 日から 150 日まで系統間変異が大きかった。ただ、各地ごとの系統の最大到穂日数は緯度に対してクラインを示した。上記タイヌビエと同様、データは示していないがいずれの年次・播種期においても同様の反応であった。このイヌビエにおける現象は同じ夏型雑草であるメヒシバでも見られている (Kataoka *et al.* 1986)。

ヒメタイヌビエは、地理的にも関東以西に分布が限られ、出穂期も限定しているため変異の幅は小さかったが、緯度に対してタイヌビエと同様緩やかな地理的クラインが認められた。

参考文献

- 古谷ら 1978. 水田における野生ヒエの生育と種子生産. 雑草研究 23 : 180-185.
- Nakatani *et al.* 1998. Geographical variation in heading photoperiodic sensitivity of *Echinochloa oryzicola* Vasing.. Weed Research (Japan) 43 : 108-113.
- Yamasue *et al.* 1981. Variations in growth, seed dormancy and herbicide susceptibility among strains of *Echinochloa oryzicola* Vasing.. Weed Res. (Japan) 26 : 6-13.
- Kataoka, M. *et al.* 1986. Differential heading behavior of some *Digitaria adscendens* Henr. populations. Weed Res. (Japan) 31: 36-40.

[次回につづく]

田畑の草種

垣通し (カキドオシ)

その村での氏神様の祭礼は毎年春に行われ、村の梅園で梅の花が終わった頃に行われた。祭礼の最後の儀式が金的きんぎょを射る御的射おまといの神事であった。射手は集落ごとに選ばれた少年で、彼らは御的射までの間、精進しながら一所懸命に弓の練習をした。少年たちは射手に選ばれただけで鼻高く、周囲の大人たちからもやんやの喝采を受けた。さらに射手を出した家には周りの家や親類から祝い物が届いたりもした。御的射でうまく金的を射たなら、その集落は一年中の仕合せを手にし、少年も英雄に祭り上げられることから、村中が沸き立つのであった。

御的射は梅園の中に設えられた会場で行われた。御的射の場のために箭やを射るところだけ昔から梅の木を植えてはいなかった。周りに紅白の幕を張り、村の人たちも集まって御的射が行われた。

金的までの距離はおおよそ 20m。射た箭が金的を射貫いたとき、その弓と箭を三方に載せて神前に供え、祭礼が終わる。ところが少年たちは普段から弓箭を扱う訳ではなく、技量は劣り、金的を狙ったところでおいそれと中るわけではなかった。

梅の花は終わっているので梅の香が匂い立つことはなかった

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

が、会場の足元にはカキドオシが群生していた。少年たちはこのカキドオシが群生している中に踏み込み弓箭を構えた。何人もの少年たちが踏み込むことで、弓箭を引く少年たちをメンツールのような芳香が包み込んだ。少年たちはこのカキドオシの出す香気に惑わされることなく箭を射なければならなかった。

御的射は少年たちの誰かが金的を射貫くまで続けられる。それでも誰も射貫けず、暗くなって金的が見えなくなってきたら、神主が箭を持って出てきて金的に突き刺す。そうして祭礼は終わることになる。

カキドオシはシソ科カキドオシ属のつる性の多年草。全国无路傍、樹園地、畦畔、畑、庭などに普通。根は浅く乾燥は好まず、適度に湿った場所を選ぶ。花の頃には 5cm ~ 20cm に直立するが、花後は茎が伸長するにしたがってつる状になり地面を這う。こうして伸びて隣家との間の垣根を通っていくことから「垣通し」の名がついた。茎の断面は四角く、葉は対生、長い葉柄があり、円形から腎円形で長さは 2cm ほど。柔らかくしわがありまばらに毛がある。揉むと強い香りがする。